

第三節 昭和前期の兵庫縣

金融恐慌・大恐
慌・農業恐慌

昭和に改元されて七十余日、昭和二（一九二七）年三月七日に、丹後半島を震源地とするマグニチュード七・三の地震が起こり、豊岡町では震度六を記録したという（北丹後地震）。

それから一週間後の三月十四日、片岡直温かたおかなおむね大蔵大臣の失言に端を発する金融恐慌が起こった。昭和二年春、若槻礼次郎わかきれいじろう内閣は「震災手形」の処理問題、四月には台湾銀行救済措置をめぐって枢密院と対立し総辞職を余儀なくされた。台湾銀行の持つ震災手形は九九七〇万円で、うち四分の三に当たる九二〇〇万円を鈴木商店系企業が占めた。神戸では鈴木商店が倒産し、台湾銀行は休業に追い込まれた。

同年九月二十五日、県会議員選挙が行われた。結果は、政友会二五、民政党一七、日本労農党二、愛国自由党、労農党各一となった。翌三年二月には、初の普通選挙による総選挙と続いた。結果は、政友会八、民政七と拮抗し、その他革新一、愛国自由党・日本労農党・無所属各一となった。このとき政友会が第一党となつているが、以後は停滞もしくは後退しており、兵庫縣では民政党が優位に立っている。普通選挙をきっかけに初めて登場した無産政党が議席を得、十二年には四議席となり、特に定数五の兵庫一区で二人を当選させていることが目立つ（図9参照）。

金融恐慌の後、景気はそれほど好転しないまま、再び下り坂に入った。昭和四年十月、アメリカの株価の暴落に端を発する世界恐慌は日本も巻き込んだ。翌十一月、大恐慌のさなか、浜口雄幸はまぐちおさち内閣は金解禁断行に

序 兵庫県百年史を受けて

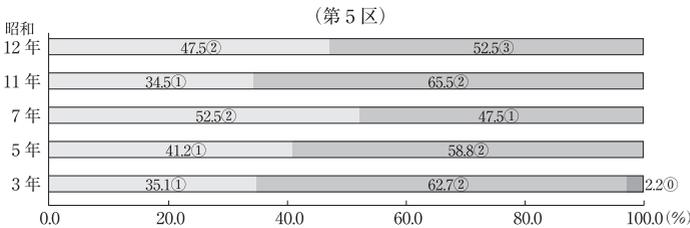
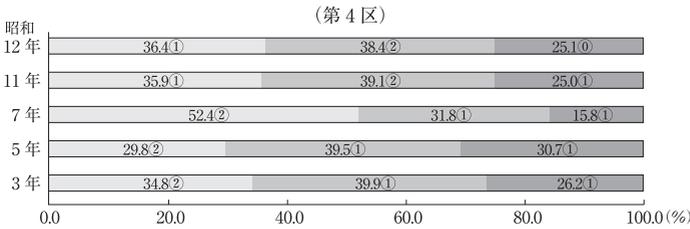
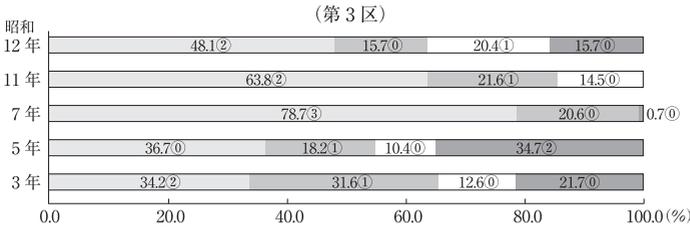
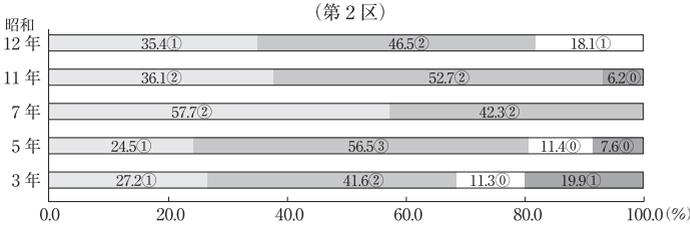
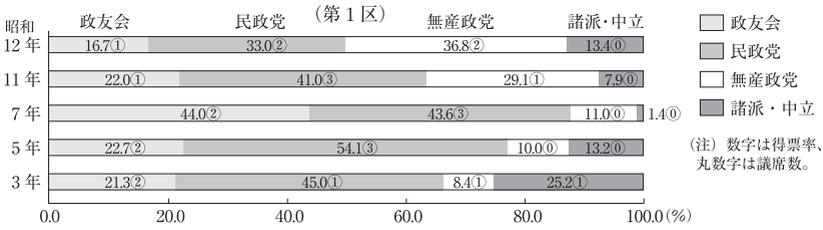


図9 衆議院総選挙党派別得票率・議席数

(『兵庫県百年史』より作成)

踏み切った。それは深刻な農業恐慌を伴い昭和恐慌へとつながっていく。

満州事変から日

昭和六年九月、中国奉天郊外の柳条湖付近で、関東軍（現地日本軍）が南満州鉄道の線路

中・大平洋戦争へ

を爆破する事件が起きた。関東軍は、これを中国軍の行為であるとして軍事行動を起ここ

した。満州事変である。国内では人びとは事変に熱狂し、軍国主義的風潮が強まったといわれる。昭和恐慌による未曾有の不況という「経済国難」、中国における国民政府による統一の進展という「外交国難」の二つの国難に悩み、国内政治における政友会と民政党の権力をめぐる泥仕合に閉塞感を感じていた。事件が関東軍の謀略であることも、これが長い戦争への道へとつながることも知らなかった。マス・メディアが満蒙進出を煽るなか、満州開拓移民が奨励された。

軍部は政府の不拡大方針にもかかわらず、上海事変、日華事変と戦線を広げていった。兵庫縣では、事変による軍需で景気は回復し貿易も好転し、重化学工業は復活、瀬戸内海沿岸東部と中西部に重工業地帯が形成され始めた。この間、十三年には阪神大水害に見舞われる。

昭和十二年の盧溝橋事件以降、日中戦争は泥沼化し、軍部支配が強まっていく。昭和十五年二月兵庫県選出の代議士齋藤隆夫は「唯徒に聖戦の美名に隠れ国民的犠牲を閑却し」と政府と軍の責任を厳しく追及した。「反軍演説」を行ったが、逆に議会から除名された。人びとの生活も次第に戦時体制に組み込まれていく。十五年隣組制度が行政の末端機関に組み込まれ、十六年国家総動員法が布かれ、同年四月からは神戸など六大都市では配給米生活となった。

昭和十六年十二月八日、日本陸軍はマレー半島に上陸し、海軍は真珠湾を奇襲攻撃し、対英米蘭戦争が始

まり、瞬く間に戦線は東南アジア、太平洋へと拡大した。緒戦の勝利に沸いた日本であったが、わずか半年後、十七年六月のミッドウェー海戦に破れてからは後退を余儀なくされ、舞台は暗転する。衣食の配給は切符制となり、人びとは耐乏生活を強いられた。家屋の疎開から学童疎開・学徒動員へ、人びとの生活は戦争に絡め取られていった。

兵庫県 最初の本土空襲は、開戦からわずか四カ月後、昭和十七年四月十八日であった。空母から発進し
の空襲 たドゥリットル中佐指揮下のアメリカのB25爆撃機一六機によるもので、その一機が神戸に來襲

し一人の死者を出した。しかし、その後二年余り空襲はなく、緒戦の勝利の中に記憶に閉じ込められた。

十九年七月サイパンが陥落し、制空権を得たアメリカは同年十月から十一月にかけて、同島にマリアナ基地B29爆撃機部隊を集め、本土空襲の準備を整えていく。以後B29は毎月平均一〇〇機ずつ増え、終戦時には約一〇〇〇機に達したという。やがて、日本本土が戦火にさらされるようになる。

米軍は、本土爆撃を二段階に分け、十九年十一月下旬から翌二十年三月上旬までを第一段階と位置づけた。同年十一月の東京空襲はほんの前触れに過ぎず、以後B29部隊の本土空襲は激しさを増した。

B29は、日本の航空機産業と都市工業地域を第一目標と定めた。米軍資料によると、攻撃は航空機工場に対する「直接攻撃」と、それ以外を目標とする「間接攻撃」の二種類に分類された。翌二十年に入ると、三月以降米軍の本土爆撃作戦は第二段階に入り、本土空襲はいよいよ激しさを増した。兵庫の空襲は次の表のとおりである。

空襲による県内の被害は、『復興誌』によると、罹災者数約七十七万人、死者一万二一六七人、重傷者六五

序 兵庫県百年史を受けて

表1 県内の空襲（昭和20年）

番号	月日	場所	主目標	参加機数	投下爆弾量(トン)	備考
20	1月19日	明石*	川崎航空機	62	154	
	1月20日		明石・阪神間			米国側に記録なし。B29 1機が投弾。死者1
26	2月4日	神戸市街地	神戸	69	4	川崎神戸鋳造所
	2月5、6、8日		神戸			米国側に記録なし
42	3月13-14日	大阪市街地域	尼崎	275	17326	
43	3月17日	神戸		307	2331	神戸大空襲
	3月18日		神戸			米国側に記録なし。グラマン機銃掃射。死者1
	4月11、22日		神戸			米国側に記録なし。数機死者2。2機死者7
172	5月11日	甲南（深江）*	川西航空機甲南工場	92	461	
	5月12、17日	神戸				1機が投弾、死者13。2機が投弾、死者9
	5月20日	明石*	川崎航空機	1	2	
187	6月1日	大阪市街地	尼崎	473	28907	川西航空機甲南 長洲・杭瀬地区などで死者300
188	6月5日	神戸市街地		474	37638	神戸大空襲。川崎神戸鋳造所
189	6月7日	大阪市街地	尼崎・武庫郡	418	26522	
191	6月9日	尼崎（鳴尾）*	川西航空機	45	2695	住友神崎工場、川西甲南工場
192	6月9日	明石*	川崎航空機	26	156	
203	6月15日	大阪～尼崎市街地域	大阪、尼崎市街地	511	33334	
200	6月17日	下関海峡、神戸		27		機雷投下
217	6月22日	姫路	川西航空機姫路工場	52	3762	
220	6月22日	明石	川崎航空機	56	154	
225	6月26日	明石	川崎航空機	31	184	
	6月26日	住友金属工業・大阪陸軍造兵廠		191	1140	
233	6月27日	萩、神戸、新潟		29	1865	
249	7月3-4日	姫路市街地		106	7671	明石酸素工場
252	7月6日	都市地区	明石	123	983	
	7月8日	宝塚ほか	神戸、西宮	114		
	7月9日	伊丹・西宮ほか		122		川西鳴尾工場
281	7月19-20日	神戸、西宮、尼崎		29	7453	
	7月22日		阪神ほか	122		
285	7月24日	宝塚	川西航空機宝塚	88	458	
	7月24日	伊丹	飛行場	14	1	
	7月24日	姫路	飛行場	18	2	川西鶴野工場
	7月28日	姫路・加古川		18		グラマンP51、340機が来襲
	7月30日	姫路	飛行場	27	4	
	8月1日	明石ほか		79	79	
	8月2日	神戸・姫路・阪神間				グラマンP51、45機来襲
314	8月5-6日	西宮～御影市街	西宮	261	19228	川西甲南・鳴尾工場、住友西宮工場
	8月8日		神戸			P38、P51、70機機銃掃射
322	8月9-10日	日本石油関西製油所	尼崎	107	928	
	8月11日	神戸・武庫郡				B29、P51来襲、死者54。
	8月14日	神戸・武庫郡				B29、艦載機機銃掃射

【出典】本表は、『現代史資料・太平洋戦争5』、『米軍資料日本空襲の全容』、尼崎市など各自治体史を基に作成した。番号はB29部隊の作戦任務番号。*は直接攻撃。灰白色は米側資料不明。

六八人、軽傷者二万二七五五人、計四万一四九〇人に達した。建物の被害は、全焼全壊一八万九九〇一戸、半焼半壊九三九六戸、計一九万九二九七戸にのぼったという。

第四節 敗戦・復興そして成長へ

敗戦と占領―非軍事化と民主化
昭和二十（一九四五）年八月十五日、日本はポツダム宣言を受諾して降伏した。九月二日には、ミズーリ艦上で降伏文書への調印が行われ、ここにダグラス・マッカーサーを連合

国軍最高司令官とする占領が始まった。以後、占領軍は国内各地に展開していく。

兵庫県への最初の進駐は九月二十五日だった。早朝和歌山湾に上陸した米第六軍第三三師団の一部が、夕方神戸に姿を見せた。司令部（兵庫軍政部）は、二十四年近畿民事部に改組されるまで県会議事堂の建物に置かれた。占領軍は、姫路、西宮、宝塚など県内各地に散っていった。三宮税関前や神戸駅前にキャンプが設置され、「日本人立入禁止」の看板が立てられた。県内の占領軍の兵員数は二十年末で一万六〇〇〇人近くに及んだ。

荒涼とした焦土の中、人びとの衣食住は窮迫し、飢餓線上をさまよう。昭和二十年は、明治三十八年以来の凶作で、一〇〇〇万人餓死説が流れるなど、食糧危機は切迫の度を深めつつあった。

この間マッカーサー率いる連合国最高司令官総司令部（以下、GHQ）は、十月の「人権指令」、つづく「五